



< 経営事項審査における企業評価の変遷に思うこと >

国土交通省は、経営事項審査において一貫して「技術と経営に優れた会社」の評価育成に力を入れてきましたが、その内容は平成の時代を振り返っても大きく変化しています。特に、完成工事高(X1)への配点は国土交通省の考えを如実に示しているものといえます。

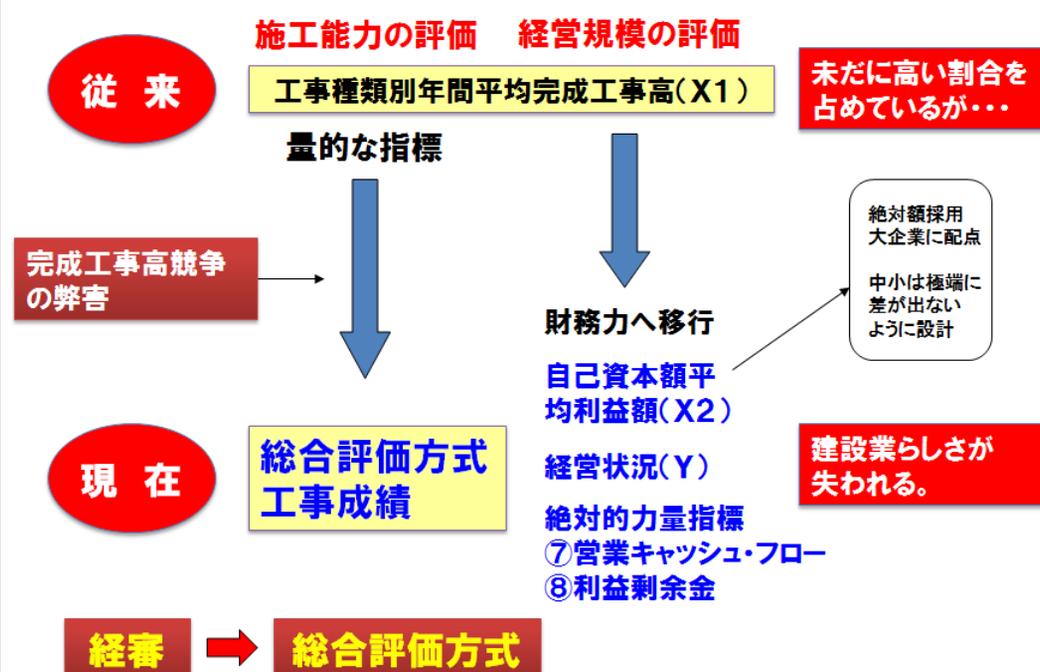
工事種別年間平均完成工事高(X1)は、施工能力の評価と経営規模の評価の二つの役割を担っていました。そして、昭和63年から平成10年6月までの完工高(X1)のP点(総合評定値)に対する配点割合も約50.1%と相当高い割合になっていました。しかし、現在は、その配点割合が約25.8%と当時に比べると低くなっています。

完工高(X1)の配点の高さから完成工事高を増やそうという競争が起き、さらに、バブル経済崩壊後の長引く不況の中で建設業者の倒産が急増したことにより、平成10年には経営状況(Y)の配点割合を上げ、さらに、平成11年には有利子負債や不良債権に対応する新しい経営状況分析指標を導入しました。このことにより、経営状況(Y)への関心は高まり、特に中小の会社で点数が高い会社も現れました。経営状況(Y)についてだけ見ると大手の建設会社の点数の方が低い事例も見られ、特に大手建設会社にはこの経営状況分析指標の評判はよくありませんでした。そこで、平成20年に現在の経営状況分析指標に変更されました。

現在の経営事項審査においては、経営規模の評価は、完工高(X1)から財務力へ移行しています。もちろん、全て移行したわけではありませんが、自己資本額平均利益額(X2)や経営状況(Y)の絶対的力量指標(営業キャッシュ・フロー(X7)、利益剰余金(X8))の配点を高くして、その役割を分担しています。このことにより、経営規模の評価における「建設業らしさ」は失われ、兼業大手が躍進しました。また、大きい会社が相対的に高い点数になる評価方式が導入された上に、経営状況(Y)の総資本売上総利益率(X3)の配点が高いことにより比較的小さい会社の点数も高くなり、結果として、中間層の経営状況(Y)の点数が相対的に低くなってしまいました。さらに、自己資本額平均利益額(X2)は指標としてはひとつですが、中小会社においては点数に差が出ないように設計されており(詳しくはWiseNET2008.05月号参照)、この点でも中間層にとっては厳しい状況です。

次に、完工高(X1)に求められていた施工能力の評価は、総合評価方式に移行しつつあります。施工能力を直接評価する総合評価方式は、従来の入札制度を大きく変えています。現在は、経営事項審査において目標点数を獲得するだけでなく、入札においてもよい位置にいるため工事成績等をよくしなければならないのです。工事成績等がよい会社は経営内容もさらによくなり、悪い会社は経営内容の悪化に苦しむのです。厳しい競争に打ち勝たなくてはなりません。

企業評価の変遷



このような状況の中で、建設会社の現在の関心事は総合評価方式に移行しつつあります。現行の経営状況分析指標への批判もあまり聞こえてきません。この指標はしばらく続きそうです。そこで、主に経営状況(Y)の解説をしていたワイズネットもしばしお休みとしたいと思います。私自身としては、グループ法人税制と経営状況(Y)との関係などまだ解説すべきものもあるのですが、少し専門的すぎて気軽に読んでためになるというものでもありません。そこで、経営状況分析指標が改正されるまでの間休止いたします。1999年から14年間続けてきましたが、その間、このワイズネットを読んでいた皆様へ感謝申し上げます。

WISENET編集部 松村 清 (税理士)